

歴史探訪

クラブ

History Inquiry Club



文化財課 ☎23局 3635
FAX 22局 3811

縄文時代の巨大なマツリ 保美貝塚のなぞ②

平成22年の夏、保美貝塚で国立歴史民俗博物館の山田康弘さんらの研究チームが「盤状集骨墓」と呼ばれる縄文時代の墓を26年ぶりに発見しました。このお墓は、墓穴内に手足の骨が正方形もしくは多角形に規則正しく並べられ、その中に他の骨が収められています。これは全国でも三河地方でしか見つかっていない大変珍しいもので、ほとんどが渥美半島で発見されています。特に保美



●保美貝塚で見つかった盤状集骨墓

貝塚では、この墓が集中的に発見され注目されています。

墓に葬られている遺体は、1人の場合や、9人という事例も報告されています。このような葬り方は、縄文人がまとめて葬り直した墓、疫病など集団で亡くなった人たちの墓、不幸な亡くなり方をした人の墓など、さまざまな説があります。よく似たもので、大きな穴に、たくさん人の骨をまとめて埋める多人数集骨という葬り方もあります。このように、一度骨になった遺体を再び葬

り直すことを再葬と呼び、この地方では縄文時代の終わりに発達しました。遺体を焼き骨にしたり、土器に骨を入れたりして葬る場合もあります。これは、遺体を骨にする過程がありますので、時間と手間がかかるものです。

このような墓は、縄文時代終わりの自然環境の変化で人々の不安が広がり、その不安を解消するために、祖先の人たちを再び葬り直す儀式を行い、血縁やムラなどの地域の絆を深めることが目的であったという説があります。現在でいうお葬式やお墓参りは、死者を弔うだけでなく、社会の絆を深める大切な行事だったのでしょうか。このことを、縄文人は生きる知恵として知っていたのだと思います。

この盤状集骨墓には、年齢や性別も関係なく葬られています。近年の研究では、「①頑丈な骨格を持つ②下あごの犬歯が抜かれている」という共通点がみられます。①については、遺伝的な理由や労働条件などが考えられますが、②については、その人の立場を示すものなのかもしれません。また、今回の保美貝塚で

の発見例は、多人数集骨と焼かれた骨などが加わり、再葬にかかわる全ての要素がみられる、より複雑な墓となっています。

保美貝塚では、人々の絆を深めるため、盤状集骨墓を作って祖先へ祈りをささげたことが考えられます。しかし、これらを証明するには、葬られた人たちの血縁関係や社会的な立場、死亡理由などについて詳しく研究する必要があります。研究チームの発掘はまだ途中ですが、盤状集骨墓から得られた骨のDNA分析など最新の研究方法を駆使し、縄文時代の社会解明に挑戦しようとしています。その成果に、大きな期待がかけられています。

(増山)

今月の「表紙」

▼昨年の10月から12月にかけて、日出の石門から昇る朝日を、恋路ヶ浜や日出園地で撮影した私。撮影時には、遠方から来たアマチュアカメラマンの方々と、田原の撮影スポットなどについて話しながら日の出を待つこともしばしば。その度に、田原はきれいな所なんだと再認識しました。(O)

【表紙の写真】日出の石門と朝日(恋路ヶ浜)